



大方あかつき館報

第22号  
2015年3月発行

# あかつき

## 対談・「作品の背景に在るもの」

―作家・中脇初枝さんに聞く―

この対談は、二〇一四年度・特別企画展「わたしをみつめて」中脇初枝・文学の軌跡」の関連企画として開催された「第一回文学講座」でのものです。

日時…2014・8・17(日) 14:00～16:30  
会場…大方あかつき館2F会議室

### 対談者

中脇 初枝さん(作家・横浜市在住)  
山沖 幸喜(上林暁文学館長)

### 「魚のように」について

山沖…「魚のように」を書かれたきっかけは。

中脇…中高(中村高校)の三年生の春でした。受験勉強せんといかんかったがですけど、せんといかんと思うたら出来んもんで、本を読むがとか文章を書くが好きやったけん、なんか書いてみたいなあ思いつた時に、高知新聞で「坊っちゃん文学賞を募集します」いう記事を見たがです。原稿用紙百枚いう規定でした。百枚やったら書けるかもしれん思うて、書いてみました。

山沖…何か普段からそういうものを書いていたとか、そういうことは。

中脇…文章書くがは大好きで、高校生のころは忙しい部活やのうて茶道部やったけん、土、日はいつも家で本を読みよりました。そのころ古典が好きやったがですけど、古典を読んだら

その時代に合わせて、今日は江戸時代風に書いてみるとか、今日は平安時代風に書いてみるとか、そういうことを一人で誰にも見せんとこっそり暗うにやりよりました。また新聞を読んだら、その記事に対して、別に誰からも求められでもないに、自分の意見を原稿用紙二枚で書くとか、そういう一人エッセイとかもしよりました。

山沖…作品、今でも読んだりすることありますか。

中脇…はい。最近、デジタル化するということで読み直したがやけん、やっぱりはずかしいですねえ。気に入らんところもあるけん、それはまあ17歳の時に一所懸命書いたがやなあ思うて、感動もしました。

山沖…一番最初の作品は、いい意味でも悪い意味でもすべてが集約されているといわれますので、そういう意味では中脇初枝そのものかも。

中脇…そうですね。やけん、一字一句変えんとそのままデジタル化しました。

### 虐待問題にとりくんで

山沖…2012年になって、『きみはいい子』が、本屋大賞をはじめ様々な賞を受けていますねえ。虐待という悲惨なテーマで書かれようと思われたいきつけかけというのは何だったんですか。

中脇…ちょうど大阪で、姉と弟の子どもが二人、マンションに置いていかれて二人とも亡くなった事件があったがです。あの事件のころ、ちょうど子育て真っ最中やったがですけど、ひどいよ思うたがです。ほんで、こういう事件

が起こらんようにいか、最悪な結末にならん方法はなもんやろうかと思うたがです。小説やったらそういう最悪やない道を選ぶという選択肢がとれるがやないろうか思うて、小説でそういう可能性を追うてみたがです。ほんまはほかに書かんといかんがあつたがですけん、これはほんまに待つたなしやなあ思うて先に書いたがです。

**山沖**…五つの物語とも明るい展望が予感させられるような形になっている。中脇さんの作品は、すべて最後の所でなんかホッと救われるような場面に出会うのですが、あれは、中脇さんの人間性なんですかね。作品としてそういうふうに意図されているのですか。

**中脇**…人は最悪にならん道を取れるがやないか、子どもは無力な存在やけんどうしようもないけん、親がでんかたら親の周りの人とか、親の親とか、他の人が助けてくれる道があるがやないか、いうことはいつも思うております。突き放してしまういうがは、現実の世界でもいやというほどあるけん、そうやない幸福な結末を読んでほしかつたがです。

**山沖**…中脇さんの書かれたものを読むと、「べっぴんさん」いう一声を幡多の方たちがかけていたと書かれてあつたんですが。

**中脇**…そうながです。こんまい女の子には名前呼ばんと「べっぴんさん」言うてくれよつたがですよ。近所のちよつと手の空いたおばちゃんとかおんちゃんとかあが、学校から帰りよつたら「べっぴんさんおかえり」言うてくれよつた

した。なんちゃあ思わんと大きいなつたがですけん、今思うたら、べっぴんさんと呼ばれることで自分を認めてもらいうるか、褒めてもらえるわけですよ。「あんたえい子やね」って言われようようなもんで、そういうふうになんか思つてそだてる幡多の子は、幸せやなあ思いました。

**山沖**…一方的に加害者が悪いって言われるけど、その加害者のもつてる弱さっていうか切なさというところまで切り込んだ作品で、とっても深いなあと思いつつながら読ませてもらったのですが。虐待の連鎖とか関連性を断ち切るにはどうしたらいいのでしょうか。

**中脇**…虐待をした人からもされた人からも話を聞きました。「べっぴんさん」では、された人が二人おつて、一人はまた虐待をしてしまうけん、一人はせん。「うばすて山」では、虐待した母親が年を取つてわからんやつてしもうても、やり返さんがです。なぜかいうたら、近所の人らあに優しいにしてもろうちよつたがです、子どものころに。ほんで、自分を大事に思うことができちよつたがです。自分がまず大事にされちよつたが、他人を大事にできるがであつて、他人を大事にしようばつかりいうがは、ちよつと無理があるけんね。やけん連鎖を止めるいうがは、誰やちええけんその人に「べっぴんさん」言うちよつたらええがやないろうか。言われて育つても生活の苦労とか、大変なことがあつたりして自信が揺らぐこともあるでしょう。けん、そういう時も、やつぱり誰かが支えちよつたが。

らなあいかんと思つたが。

**山沖**…べっぴんさんという言葉を常にかけてもらつていたことが、どつかで一歩踏みとどまる力になった。「きみはいい子」という言葉がけも同じことですよ。次の『わたしをみつめて』これも素敵な作品でしたけど、どこかの取材で。**中脇**…そうですね。児童養護施設にも行きました。入所しちよつたがは、金銭的にも精神的にも生活面でも支えがないけん、落ち着いて勉強するがは難しい。女の子やたら看護師か美容師しか選べんかつたりして、選択肢が限られちよつたが。人生のスタートが他の人よりもえらい後ろの方からになる。

それから、看護師いう仕事がいかに過酷で、かつ、すばらしい仕事かいうことも伝えたいと思つたがです。登場する、九九がでん看護師いうがは偶然出会うた方です。あまりに医師が悪いに描かれちよつたが、ひどすぎるいう人もおるがですけん、これでもうすめて書いたがです。ほんまのこと書いたら、とても小説にならん。でも、そんな中でもちろん、ええ医師もおるし、一所懸命にがんばりよう看護師さんらあもおるいうことを書いてみました。

**山沖**…素敵な看護師さんが出ますね。

**中脇**…そうながです。ああいう素敵な看護師さん、何人かの方に取材さしてもらいました。

**山沖**…次の作品も、虐待の話が続くんですかね。**中脇**…「きみはいい子」は、実は、そもそも、六つの短篇を書いちよつたがです。ほんで、最初に書いた一篇だけを本に入れんかつたがです。

本が厚うになりすぎますけんね。「わたしをみつめて」は、その一篇を膨らまして、医療の問題にも切り込んでみたものながです。やけん、もうこれで  
虐待の問題  
については  
書ききった  
ように思い  
よります。



### 幡多の昔話に魅せられて

山沖…ところで、小説だけでなく、幡多の昔話をたくさん書かれています。

中脇…はい。もう、昔話は大好きでした。テレビの「まんが日本昔ばなし」、あれで育った世代でも、周りに昔話をしてくれるような人は、もうおりませんでした。わたしに決定的な影響を与えたのは、この本です（『幡多の昔話』の本を手）これは、「幡多国語の会」の先生方が作ってくれた昔話の本です。これを読んだとき、まあ幡多の昔話やに、世界や日本の昔話と同じも  
んがあるよと不思議に思ったがですね。自分が住みよう狭い世界でも、世界に広がっちゃうのがやなあ。人は繋がっちゃうのがやなあということを知りました。そういうことを勉強したいよ思  
うて、大学で民俗学を勉強しました。それから幡多の昔話を調べて今の人らあに伝わるように再話をするようになりました。今も、福音館書店のWEB雑誌で「ちゃあちゃんの昔話」いう

題名で幡多の昔話を連載しよります。幡多はそんなに広うないですけん、七百以上の昔話が伝わっちゃよります。

山沖…一つ話してもらえませんか。

\*『じゃんこじゃんこ』（大方の昔話）を語る。

とんとんそれまでと。（拍手）

### 次回作は

山沖…和やかな雰囲気になりますね。こんな話の中で育っていく子ども達って、虐待だとか、居場所がなくておろおろとかじゃなくて、ほんとにしっかりと地に足がついて、前向きな気持ちで生きていける。時間が来ましたので最後に。

次回作、今どんなものを書かれていますか。

中脇…昔話を教えてもらうのが幡多のあちこちを歩いていろんな方にお話を伺いよったら、西土佐の人らあが戦時中、満州に開拓に行ちよったいうことを教えてもらいました。西土佐開拓分村のみなさんは四百人ばあおったけん、生きて日本の土を踏めたがは百人ばあで、亡くなった7割以上の人のほとんどは、引き揚げのときに亡くなられちよります。その開拓団の子どもらあ、満州に連れていかれたばっかりに、亡いなったり、両親も兄弟もおじいちゃんおばあちゃんも満州で亡くして、一人で戻ってきたりしたがですね。一方で、中国の人らあにしてみたら、家をとられ土地もとられたわけです。開拓団が入る前に、満州拓殖会社がそうやって用意しちよったがですね。国策ですけん。中国の人らあにしてみればそうやし、韓国・朝鮮の人らあにして

も、それぞれの国に、上がった声があると思うんですよ。そういう、わたしらあのところまで届かんまんま消えてしまうような、小さい声に耳をすまさんといかんと、いっつも思いよります。開拓団に行つた西土佐にやち、予土線作るがに朝鮮人が連れてこられちよった。ちなみにわたしに「べっぴんさん」いうて一番言うてくれた人は、在日韓国・朝鮮人の一世のおばあさんでした。言葉がちごうても土地がちごうても、人同士っていうがはつながるがですね。思わぬ所で思わぬ人と出会って、また次の時代になっていくがです。そういう話を今は書きよります。

山沖…一緒に行かれたという話を聞いています。

中脇…西土佐開拓分村のみなさんは2年に一回はあ満州に慰霊の旅に行くがですね。今年の五月にわたしもまぜてもろうて行かしてもらいました。こんなとこまでよう行つたなあ、つくづく思いました。ほんまに人いうもんは、空間も時間も越えれるがですね。言葉やって越えれる。山沖…いつごろでき上がるんですか。

中脇…（戦後）70年に合わそう思うて、必死で書きよるがですね、がんばります。もし興味があつたら読んでもらえたらうれしいです。

山沖…ちよっとキナ臭いにおいがしているの、今こいうテーマで書かれるってことは、ほんとうに大切なと思います。楽しみにしています。

\* 対談時、執筆中だった小説は『世界の果てのこどもたち』というタイトルで、2015年6月に講談社より刊行予定。

『きみはいい子』も映画化され、2015年6月に公開される。



# あかつき館 \* 催し点描

## 第13回上林暁忌俳句大会

8月24日(日)に暁忌俳句大会が、黒潮町保健福祉センターで開催されました。

俳誌「夏爐」主宰の松林朝蒼さんが選考を務め、上林暁大賞には、山崎紀美子さん(土佐清水市)の「倒れたる稲を刈りをり暁忌」が、他に一志賞、暁賞など19句が選ばれました。



### 図書館企画展

## キャンドルとアンデス音楽の夕べ

11月15日(土)、あかつき館が「mowcandle」さん制作の千個のろうそくの光に彩られるなか、野外ステージでは「ロス・トマテス」のケーナなど民族楽器を使ったアンデス音楽が演奏されました。



500名を超える方々が、揺れる炎と郷愁を感じさせる音楽に酔いしました。



### 特別企画展

## 「わたしをみつけて」

～中脇初枝・文学の軌跡～

6/7～8/31開催。「魚のように」で、第2回坊っちゃん文学大賞受賞。「きみはいい子」で坪田譲治文学賞を受賞した作家・中脇初枝さんの幼少期の写真や作文、創作メモや最終グーなど50点を展示。期間中、約900名の方々が観覧しました。

また、8月17日には、「第1回文学講座」として館長との対談が行われました。



### 館長奮闘記

## ～プロゲ『クジラのあくび』より～

われはゆくなり

2014.04.22

『胸の上に子規の書きたるへちまの句三句唱しつわれはゆくなり』 植田馨先生の辞世の歌である。入院後、わずか数日の間に70余首の歌を詠まれたとか。

彼がいなかったら、「大方あかつき館」はなかっただろうかと思われる。大きな柱を失い、途方にくれている。が、「この印刷を頼む。」と、ひょいっと事務室を覗いてくれるのではないかと。心に、ぽっかりと穴が開いたようで・・・、何だか心もとない。

一粒の麦、地に落ち

2014.09.12

父子らしき二人連れが常設展を観ている。一声かけると、息子さんが、「小学生の時、上林さんのお葬式に行ったんですよ。」と、お父さんは、「大方中で、薔薇盗人を読み聞かせしてもらった。」とのこと。お年を何うと、一学年下。同じ時期に、柿内実先生から聞かされていたのだ。50年近くたった今でも、心に刻んでいる者がここにもいる。一粒の麦が蒔かれ、私はあかつき館に勤め、彼は感慨深げに展示に見入っている。柿内先生も、ここまでは予測していまい。